

### 穿孔方向にみる硬玉製勾玉の変遷

湯尾 和広

勾玉は、縄文時代以来古代に至るまで、その独特の形態を保ちながら使用された装身具である。本論では、過去においては常に社会的・政治的動向と関わったであろう、硬玉製勾玉に焦点を当て、穿孔方向という技術的側面から変遷を探ったものである。

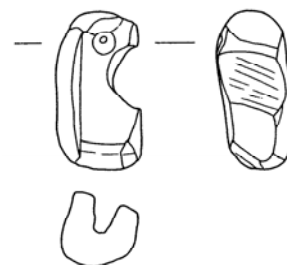
近年の発掘調査によって硬玉製勾玉生産に関わる遺跡が次々と発見されており、中でも北加賀と呼ばれる地域において、製品・未成品ともに多数見られるようになった。本稿ではまず北加賀における硬玉製勾玉生産の様相と穿孔方向の変遷を分析した。その結果としては、いくつかの地域にまとまって出土していることを確認できた。中でも金沢中部地域

と松任地域と名づけた地域では、弥生

・ 期以降、古墳前期に至るまで一貫した硬玉製勾玉の生産が行われていたことがわかった。さらに穿孔方向について

は、弥生 期後半を前後する時期に両面穿孔主体のものから片面穿孔主体のもの

へと変化しており、勾玉生産地域の金沢中部



硬玉製勾玉の未成品  
(西念・南新保遺跡)

地域と松任地域では、片面穿孔の開始面に差異のあることが推定できた。

次に北陸に目を向けると、北加賀同様の流れが看取できる。すなわち縄文後～晩期の原産地周辺での生産、弥生・期の勾玉生産の拡大、弥生・期前半の縮小を経て、弥生期後半に再び勾玉生産遺跡が増加し、庄内期後半には収束、古墳前期に金沢中部・松任地域にわずかに残るのみで、古墳中期は再び原産地周辺に限られる、という流れである。また、弥生期後半での穿孔方向の変化は、北陸全体でも同様の結果を得ることができた。

こうして穿孔方向が変化した背景には日本海沿岸を通じた鉄製工具の導入が深く関わっていると考えられる。この裏付けとなるのが弥生期に始まる山陰・丹後での水晶製玉生産である。京都府奈良岡遺跡では、石製工具を用いる緑色凝灰岩製管玉を製作するとともに、鉄製工具を用いた水晶製玉を並行して製作していた。水晶製玉の製作には片面穿孔技術が応用されており、水晶と同様、硬質な材料を用いた北陸の硬玉製勾玉生産にも、この技術が応用されたのであろう。

これまでの古墳前期後半において穿孔方向が変化する、という定説を大きく覆す結果となったが、北部九州では古墳前期前半にその変化が見られ、大きな地域差が見られる。こうした地域差は古墳成立に至る揺籃期の社会的状況とも関わってくると考えられ、今後硬玉製勾玉は単なる装身具に留まらない、当時の社会を知り得る有効な資料となるであろう。